

近世禅宗寺院本堂の研究(そのII)

蓮華寺本堂

岡野 清

STUDY OF MAIN HALL IN ZEN SECT IN EDO PERIOD (PART II)

Kiyoshi OKANO

この寺の現本堂の建立に関する文書等は見当たらないと住持の言うところであるが、矢作町史の曹洞宗の項を摘記すると、「蓮華寺は美容山と号し、夫字西本郷、私志山にあって1260坪、かつてここに和志取山薬王寺と言う天台宗の梵刹があった。その後足利將軍の帰依深く七堂を完備した郡内最古の大刹となったが、建武2年(1335)兵火で全焼したのち、享祿2年(1529)堂宇を建立し、美容山蓮華寺とし、曹洞宗となり、光国舜玉禪師を講じて現寺の開基とした。その後慶長19年(1614)烏有に帰し、元禄7年(1694)、5世嚴誉の時本堂を再建した。」としている。様式的にみてもその時代のものに現本堂は該当していると思われる。

規模 構造

桁行10間(但し南1間半は後の増築、この部分の奥に設けられた仏壇虹梁に文久3年の墨書がある)。堂は東面、梁間7間半で前面中央に唐破風をあげた向拝がつく。軒は1軒半繁垂木、屋根は寄棟造棧瓦葺。後補部分を除けば、前1間半を広縁とし、その奥の間(上、中、下の間)又その奥間(上奥、中奥、下奥の間)とも各3間の奥行で、その背面には更に半間の下屋がつき、その部分は仏壇の列となっている。間口は中央間が3間半で、その両脇の間とも2間半がある(図1)。

柱は後補の向拝を除き全て檜材の大面取角柱で、広縁外は中央で3間半、両脇2間半に大きく分け、柱間に差鴨居を入れ、中央鴨居上には束を2本立て、柱間に戸4、障子2を嵌め、両脇間では中央に柱を立てて2分し、中敷居を入れて硝子障子をはめる。柱及び差鴨居上の束上には舟肘木をつけ、小壁には飾貫を入れる(写真2)。

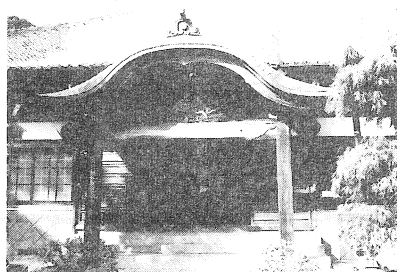


写真1 向拝唐破風(後補)



写真2 広縁外脇間



写真3 向拝唐破風内部

北

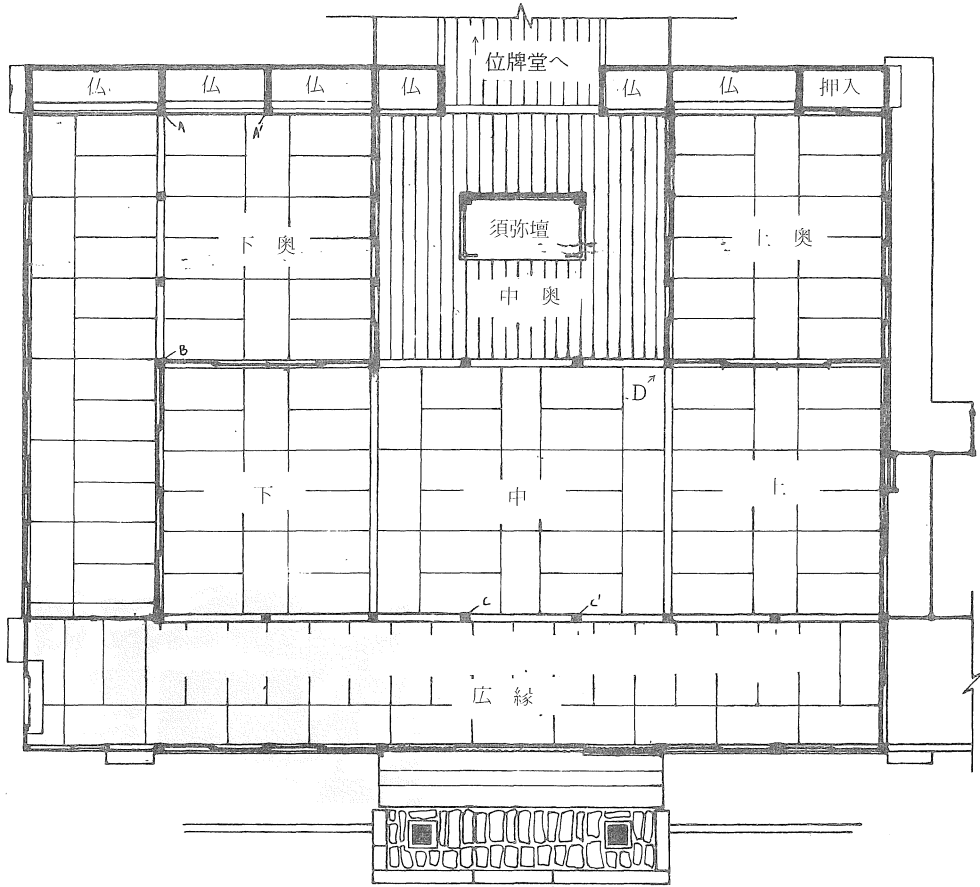


図1 蓮華寺本堂現状平面図

向拜上部の唐破風は後補で、柱間の絵様つき虹梁、木鼻、斗拱等は古く、(写真3)、元は普通の下げおろしの向拜であった。

広縁と、中之間との境では中央間をやや広くとって3分し、上下の間との境は2分して柱を立て、敷鴨居は三

本溝で、柱には方立取付けの釘穴が見られる。広縁の両妻とも敷鴨居、内法長押を入れ、中の間中央柱間には長押を用いず、内法を高めて虹梁をかけ、その上に欄間を入れ更にその上に壁をつける(写真4)。虹梁下には鴨居を入れ、(内法長押の枕捌き部分を建具分だけ縦に切

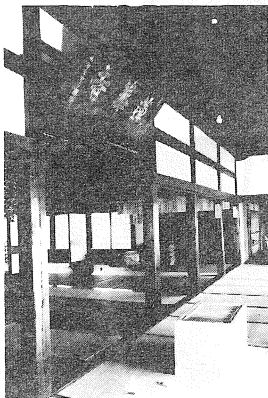


写真4 広縁内側柱割

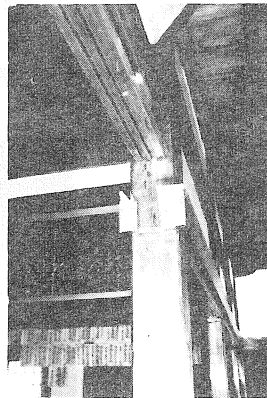


写真5 広縁と中の間境



写真6 中の間、中奥の間の境

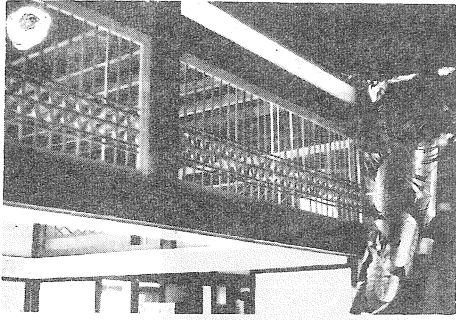


写真7のA 中、下との境の欄間

断している（写真5）。広縁天井は棹縁。

上、中、下の3室では敷鴨居、内法長押、天井長押を廻らし、蟻壁では柱や束をみせ、天井は棹縁とする。上、中、下の室境にも敷鴨居、内法長押、天井長押を廻らし、中央の釣束で吊り、内法天井長押間には箴欄間（欄間は新）を入れる（写真7のA）。

中奥との境では中央間をやや広くして内法を高め、3間とも絵様つき虹梁を入れ、中央虹梁の両端を絵様つき挿肘木で支え、虹梁上には箴欄間を入れる（欄間は新）（写真6 図2）。この部分敷居のみ2本溝があるのは奇異である。

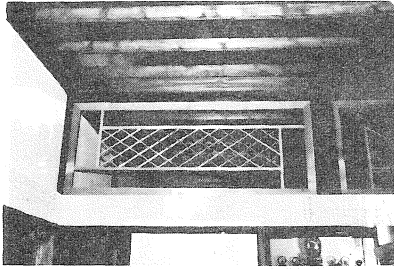


写真7のB 下、下奥との境欄間

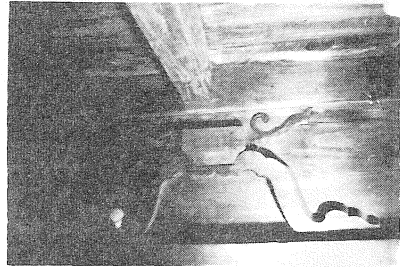
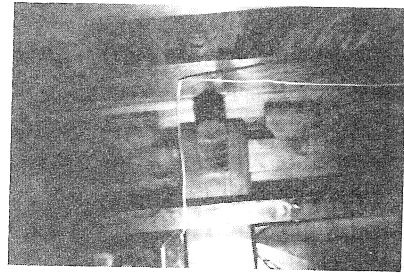


写真8 中奥の天井下廻り部分

上奥、下奥との境は2間半開放で釣束を用い、襖4本建てとする（写真7のB、図3）。

中奥は敷居一段高くし（写真16）、上奥下奥との境に1間毎に柱を立て、敷鴨居、内法長押をつけ、小壁上の天井長押位置に中奥周囲をめぐって台輪を入れ、その上で柱から挿肘木にして左右に斗拱を、前方へ木鼻を出し、中備に蟻股（股間は空）をおき、裏に板をはめ込ん

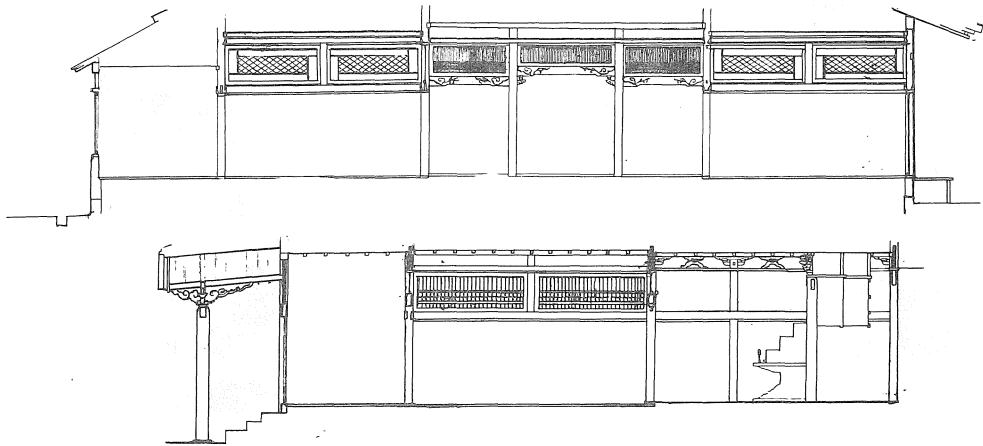


図3 蓮華寺本堂現状断面図

でいる（写真8）。

背面ではその奥に左右脇仏壇を設け、脇仏壇前の落掛上には彫刻入りの欄間を嵌め、両脇仏壇の間を広くとって背面に設けた位牌堂に通じる。その通路上仏壇前柱間には台輪下に虹梁を入れ、両端を木鼻で受ける（この虹梁木鼻は様式が新しい）。

脇仏壇前から1間前には几帳面取角柱の来迎柱が立ち、柱上には棕がつき、柱間及来迎柱後方の釣仏壇との間に頭貫を渡し、木鼻をつけ、台輪をまわし、柱上には出組斗拱、拳鼻、実肘木つきをのせ、中備に臺股を入れ（写真9）、前には唐様仏壇がおかれる（写真10）。

上奥下奥の両間では側柱通りでは1間毎に柱を立てて上奥背面では下屋を外方1間、内方1間半に分け、外方1間を押し入れとし、内方1間半には前面に虹梁を入れて

（虹梁様式は新）仏壇とし、虹梁上は小壁とする。下奥では背面下屋を2分して各仏壇とし、仏壇前には虹梁を渡して上を小壁とする（写真11）。後補の南方1間半のつけ足し部分の奥にも仏壇を設け、仏壇前には虹梁（文久の墨書あり）を入れ上を壁とする（写真12）。

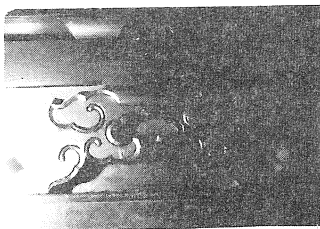
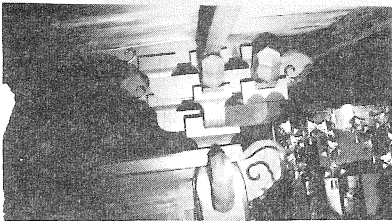
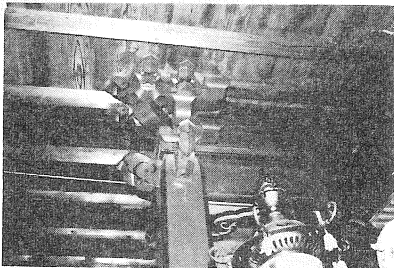


写真9 来迎柱上斗拱と柱間台輪上部中央の臺股

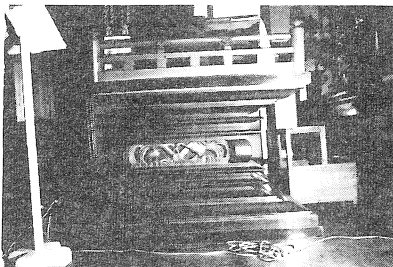


写真10 来迎壁前唐様仏壇

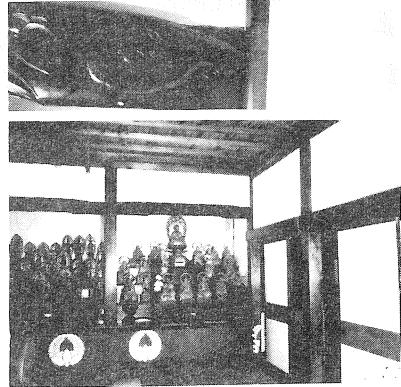


写真11 下奥の間背面仏壇と虹梁絵様

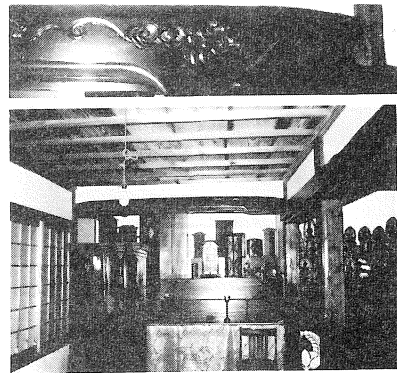


写真12 下奥の間の南の間の背面仏壇と虹梁
虹梁裏に文久3年の墨書がある

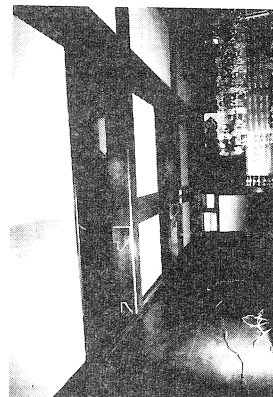


写真13 中奥、下奥境

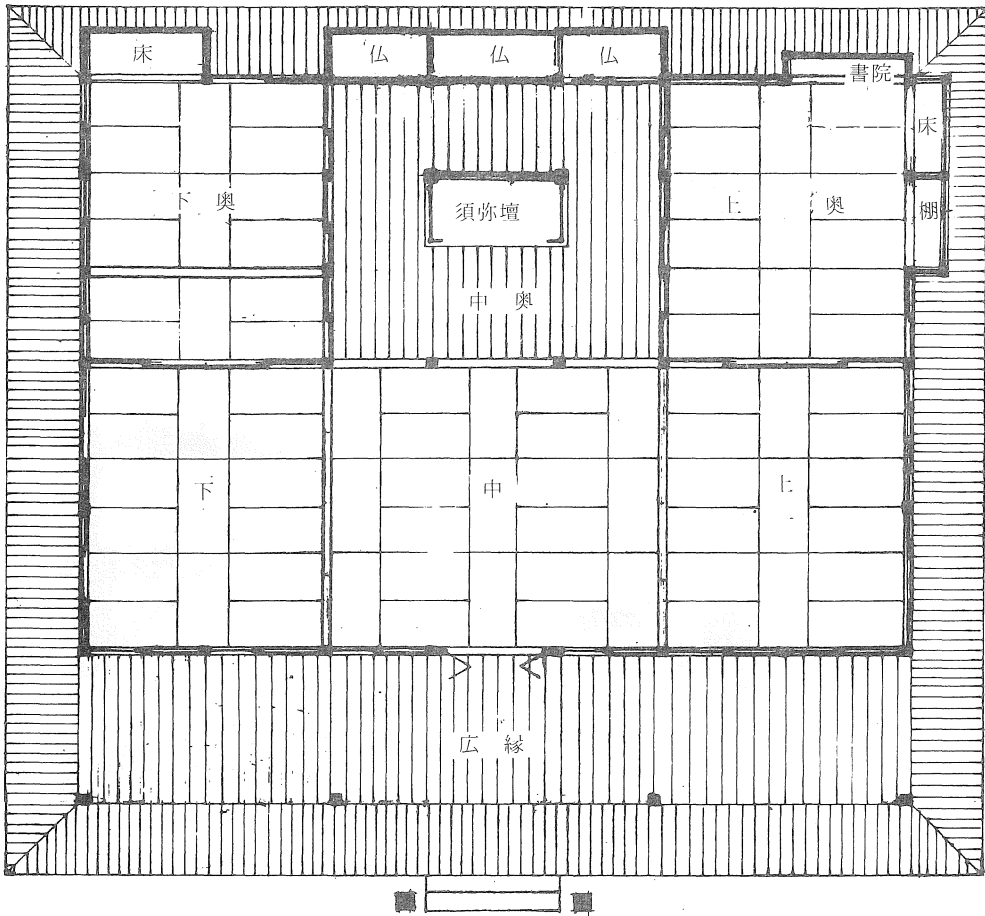


図3 蓮華寺本堂復原平面図

復原的考察

本堂は禅宗寺院の方丈様式を基本にしているが、改造が著しいのは、中奥と上下奥の背面下屋等である。中奥背面仏壇では仏壇前列内側柱の旧位置が内方に移って背面をほぼ3等分する位置になり、そこに柄穴や柱の当た

り型、台輪に柱の通った痕跡が残る。又この柱には仏壇框の取りついた痕跡があるので、ここに仏壇が一直線に続いて後門はなくなる。こうなると来迎柱や須弥壇が問題となるが、その絵様の意匠は周囲の斗拱や臺股と異なるが、様式的に差が付き兼ねるので、最初から存在したものと考えさせられる。

なお中奥の南側柱間腰には前面上下に線型のついた棚の如きものが存在した痕跡がある（写真13）。

上奥背面では仏壇前の虹梁が新しく、鴨居や内法長押

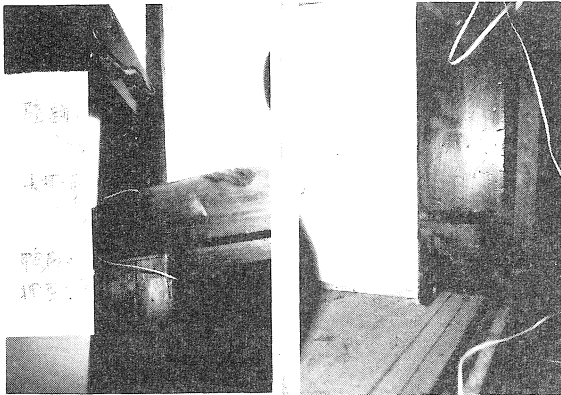


写真14 下奥背面の仏壇上には長押が廻り裏への出口（北半分、写真左）及び床（南半分、写真右）であった

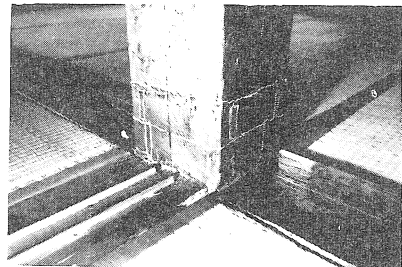


写真15 下奥の間の東南端の柱をみる左上の間が下奥の間

の通った跡が歴然としており、壁の間渡のとりつく木舞を打ちつけた釘穴や、風蝕差などから元は土壁であったことが推定される。その向って右の間には落掛や書院合板の仕口などがあって書院と見られ、北妻北端間には床框落掛の仕口、柱外面の壁の痕跡などがあって床がつき、その東隣の柱間には棚があったと推定される(図2)。

下奥は前面に中奥と同様敷居一段分高かった痕跡があり、更に畳で一段高くなり、写真15のように2段分高くなる。次に前1間と後2間の間に間仕切が通って小壁まで出来、室が分れていた痕跡がある(写真17)。

また背面下屋の南半には落掛の仕口などが見られて、元は床となり、北の1間々は敷鴨居、長押の取付痕跡があり、柱の風蝕から見て縁に接した開口であったと見られる(写真14)。

尚、前面広縁の外が、初めは開放されていて、前に落縁があったことも推定されるが、決定資料はない。

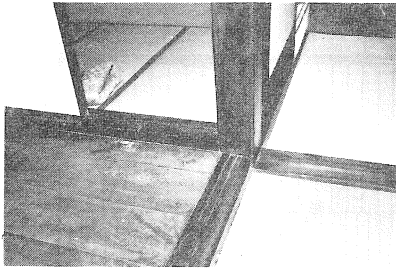


写真16 床の段(板間が中奥, 右下が中, 右上が上, 左上が上奥の各間) 図1のD

結 び

この堂で仏壇が後退した点では恵日寺本堂と通じるし、下奥を上段にした点では、良福寺(尾張旭市)の場合のあり方が一層進められており、来迎壁や須弥壇、向拝が設けられた点では仏堂的要素が濃くなる経路を示す。中の間の中央間や中奥前の取扱い方も仏堂化のパロメーターとなろう。初期の禅宗本堂と比べるとかなり変質してきていることが知られる。

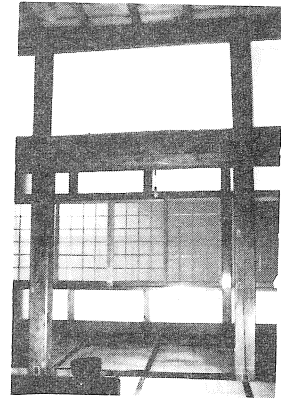


写真17 下奥の間の仕切痕跡